

書評

津波高志著

『沖縄社会民俗学ノート』

島村恭則*

本書は、琉球大学で民俗学を講じている著者の最初の論文集。著者は学生時代から十数年間、一貫して沖縄（特に本島北部地域）の村落祭祀とその司祭組織の問題を研究してきており、本書でもこのテーマを中心におき（Ⅱ部）、それと密接な関連のある、家族・親族・村落についての記述的研究（Ⅰ部）や、『琉球国由来記』に見られる年中祭祀についての歴史的視点に立つ論考（Ⅲ部）を収め、さらに「付録」として鹿児島県屋久町と韓国済州島の族制についての調査報告を収録している。

Ⅰ部は、一章「西原町の親族」と二章「伊是名村の村落と家族」。特に一章は、大和口の「親族」ということばに対する土地の人々の〈翻訳〉を積極的に用いて調査地の親族範称を探り出そうとする方法に新鮮さがある。

Ⅱ部、三章「沖縄北部川上村落の〈神座〉」は、著者の学部卒業当時の論文であり、以後の問題関心の原点といえるもの。祭場における神役の座席配置を分析することによって、双分性を統合する「真ん中の優位」を指摘し、「二分性にのっかった三分性」を論じている。四章「御嶽祭祀の主導者」では、御嶽祭祀の主導的役割をノロが根神から奪ったという通説（鳥越憲三郎『琉球宗教史の研究』）に対する反証を名護市での事例研究からつきつけている。五章「祭祀組織の変化と民間巫者」では、巫者でありながら司祭でもある者を「巫者的司祭」という用語でおさえ、そうした人々による村落祭祀の改変やそれに伴う司祭達との葛藤の実態を動態的に記述・分析している。六章「西原町のヌル祭祀・村落祭祀の司祭と祭場」では、

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

司祭の祭祀への関与の仕方によって年中祭祀を分類した上で、司祭継承や御嶽祭祀の主導者に関しての問題点を指摘。

Ⅲ部、七章「『琉球国由来記』記載祭祀と伊波普猷説」では、『由来記』記載祭祀のほとんどは中央・首里的（一般的）なものだとする伊波説以降の研究史を検討・批判した上で、現在行なわれている年中祭祀と当該する記載祭祀との比較をすべきこと、年中祭祀記載形式の不統一に注目して記載祭祀の分類・検討をすべきこと、といった今後とるべき研究上の方向を提示する。八章「『琉球国由来記』と村落祭祀」は、七章での主張に沿って、現行祭祀と記載祭祀との具体的な比較を名護市の事例で進めたもの。名護市仲尾・親川・田井等・川上での事例研究は著者の自家業籠中のものであり、手堅い分析となっている。九章「『琉球国由来記』の祭祀記載」は、やはり七章で示された課題の一つである記載形式の分類・検討をした上で、『由来記』年中祭祀記載のために琉球王府から発せられた質問形式は地域差を十分考慮したものであったのだろうかという結論を導いている。

付録は、十章「屋久町の隠居に関する覚書」と十一章「分居形態からみた済州島の家族」。どちらも綿密な調査報告であり、安易な〈比較〉に走らず、対象地域の実態を冷静に検討しようとする姿勢は大いに評価されるべきであろう。

ところで著者は「はしがき」で、「現在、沖縄の地で民俗宗教や社会構造の分野にかかわる民俗学徒は、社会人類学的諸研究の成果を避けて通るわけにはいかない。むしろ、それを咀嚼し、消化しながら、独自のものを造り上げていく努力が必要であろう。一つの学問を選択することは、それによって得るものがあると同時に、失うものもあるように思う。民俗学を選択することによって、何を、何を失うのか、あるいは何を、何を失うべきか、そこらを沖縄の地でじっくり考えながら研究を進めたい。本書のタイトルにはそのような意味合いも込めたつもりである」と述べている。著者の〈民俗学〉構想について正面から論じた部分は本書の中には見当たらない。たしかに、

枠組みだけをつくりあげようとしてもそれは不毛なことであり、本書に展開されたような手堅い事例研究をつみ重ねていくこと、即ち「沖縄の地でじっくり考え」ていくことが最も大切なことなのではあるが、津波沖縄〈民俗学〉の見通しをもう少し詳しく聞きたいと思うのは私だけではあるまい。また、周辺地域の事例報告を、今回は〈付録〉として慎重に位置づけているのだが、「はしがき」には、著者が沖縄民俗研究に周辺諸地域との〈比較〉という視点を導入しようとする意図していることが述べられている。だとすれば、著者の沖縄社会〈民俗学〉にとって〈比較〉の意義とは何なのか、あるいは沖縄本島地域と先島地域との比較についてはどう考えているのか、ぜひとも知りたいところである。

この『比較民俗研究』2号が刊行される頃、沖縄において日本民俗学会第42回年会在開催されることになっている。そこでのシンポジウムのテーマは「沖縄民俗研究の展望—東アジアの中の沖縄—」である。沖縄〈民俗学〉について、〈比較〉について、著者の発言に注目したい。

(1990年6月 第一書房 南島文化叢書11)

渡邊欣雄 編著

『祖先祭祀』

—環中国海の民俗と文化—第三卷

辻 雄二*

本書は副題にあるように「環中国海の民俗と文化」を探るため、比較研究の試みとして「中国海をめぐる各地域、中国大陸、朝鮮半島、九州、奄美、沖縄、宮古、八重山、台湾、フィリピン、東南アジア」を学際的視点から切り込もうとするものである。その地域における民俗文化の独自性を浮かびあがらせることを目的としている。

本書の構成は、まず編者である渡邊が序論として本書の統一テーマである「祖先祭祀」について

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

触れつつ、順に「本書企画の意図」、「比較対象地域限定の意図」「本書構成の意図」について述べている。以下、五章にわたり十六編の論考を取っている。

第一章 祭祀組織

第一節 韓国の祭祀と社会組織 (朝倉敏夫)

第二節 沖縄の祖先祭祀—祀る者と祀られる者 (笠原政治)

第三節 台湾漢人社会の祖先祭祀—家族と宗教の祭祀をめぐる (植野弘子)

第二章 位牌祭祀

第一節 韓国の位牌祭祀 (朝倉敏夫)

第二節 沖縄の位牌祭祀 (喜山朝彦)

第三節 台湾の位牌祭祀 (堀江俊一)

第三章 葬制と墳墓

第一節 濟州島の葬送儀礼と親族組織 (崔在錫・津波高志訳)

第二節 沖縄の葬送儀礼 (名嘉真宜勝)

第三節 台湾漢人社会の墓制 (平敷令治)

第四章 供養儀礼

第一節 韓国の喪礼について (李光奎・黄達起訳)

第二節 沖縄における墓供養—供物を中心として (藤井正雄)

第三節 清明日の墓参について (窪徳忠)

第四節 墓・祠堂・そして家—香港新界における祖先祭祀と宗族 (瀬川昌久)

第五章 靈魂観と他界観

第一節 韓国における他界観について (竹田旦)

第二節 沖縄の靈魂観と他界観 (赤嶺政信)

第三節 台湾における死者の靈魂と骨 (植松明石)

あとがき

藤井正雄の「沖縄における墓供養—供物を中心として—」(竹中信常博士頌寿記念論文集刊行委員会編『宗教文化の諸相』、一九八四年、山喜房刊)と竹田旦の「韓国における他界観について」(元興寺文化財研究所編『東アジアにおける民俗と宗